



のはら・しょうこ 1957年北九州市生まれ。25歳で南米ペルーに渡り修道院で6年間、社会福祉活動に従事。テロが頻発したため帰国。95年ボリビアに渡り、10年前から障害者支援に専念。一時帰国中は各地で活動報告会を行った。国内の窓口はNPO法人「エルビス会」=093(201)3692。

南米最貧国のボリビアで十三年間、障害者を支援し続けている日本人がいる。北九州市出身の野原昭子さんは八年前、支援施設「サン・マルティン・デ・ポレス(聖マルティンの家)」を設立。「私の家族」と呼ぶ幼児から三十歳前後の障害者計二十人と生活を共にしている。遠い異国の地で、なぜ障害者支援に心血を注ぐのか。一時帰国した野原さんに聞いた。(地域報道)

ボリビアで障害者施設を運営する

野原 昭子さん

聞きたい

センター・丹村智子

―施設の態勢は。

「スタッフは十二人で、日本人のボランティア一人を除くと全員が現地の人。うち看護師二人が交代で宿直し二十四時間態勢を維持

南米最貧国で支援を続ける理由は

している。日系人の支援で一月に建物を購入し、借家から引っ越した。別の場所にも農地を持ち、リハビリを兼ねて果樹栽培している」

「入所者はどんな人か。基本的には手術やリハビリで改善を手助けできそうな人を受け入れている。例外もある。昨年十一月に預かった少年は山小屋に放置され、排せつ物にまみれていた。十三年間身体を丸めたまま横たわっていたので、あばら骨が左右ではなく前後に広がっている。放っておけなかった。二十人中、六人は身寄りがいない」

院に入った。ボリビアには三十八歳のとき、シスターとして派遣された。貧困が深刻なボリビアでは障害者支援まで行政の手が回らず、多くの障害者は家に閉じこめられている。その人々を助けたいと思った」

「預かっている障害者にはどう接しているか。『私の子どもたち、家族として思っている。この写真の男の子は、私の足音を聞いてただで足をばたつかせて喜ぶ。売春、窃盗、麻薬を繰り返して、仲間を刺さる半身不随になった女の子は、当初は復讐(せしほ)さえていたが、心のよりどころができて変わった。子どもが母親のように慕ってくれているのがうれしい」

―なぜ、障害者を支援するののか。

「重度障害があり二歳で亡くなった妹の存在が原点にある。働いていた両親に代わって五歳上の私が面倒をみていた。もっと世話していたら長生きしたのではと悔やんでいる」

「ボリビアで活動することになったきっかけは。『両親がカトリック信者だった影響や、シスターが障害者の支援をしていると知ったこと。十六歳で修道

院に入った。ボリビアには三十八歳のとき、シスターとして派遣された。貧困が深刻なボリビアでは障害者支援まで行政の手が回らず、多くの障害者は家に閉じこめられている。その人々を助けたいと思った」

院に入った。ボリビアには三十八歳のとき、シスターとして派遣された。貧困が深刻なボリビアでは障害者支援まで行政の手が回らず、多くの障害者は家に閉じこめられている。その人々を助けたいと思った」

「睡眠は三―五時間。一年に二回ほどひどい下痢を

する。診断は過労。三日間、ひたすら眠る。それが私の年休かな」

困難な自立の道に光を

「自立の道を少しでも手助けしたい。スタッフのうち三人は障害者。別に運営しているカフェでも十人の障害者が働いている。施設から四人を小中学校に通わせている。健康児と障害児がともに学び合っている」と思い、校長と交渉した」

「今後の計画は。『今は運営資金の大半を日本の支援者に頼っている。現地スタッフが資金を集めるのは難しい。私が働けなくなった後のことを考え、カトリックの組織からも資金や人材を提供してもらえ、道筋をつくりたい。日本からのボランティアも募っていきたいと思っており、今月には三人が加わる』

◇「今を解く」は今回で終わり、四月から新紙面に移行します。